

開催地名：茨城県牛久市	
開催日時	令和4年12月23日（金） 15：00 ～ 17：00
開催場所	牛久市保健センター
語り部	大内 幸子 （宮城県仙台市）
参加者	牛久市行政区長及び牛久市防災会員 50名
開催経緯	大規模災害時、実際に避難所の運営や地域での災害対応にあたった自治会や自主防災組織のリーダーから体験談を聞くことにより、自助・共助の重要性の普及や、地域における自主防災組織活動の活性化を図ることができるようになる。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>仙台市福住町は、50年ほど前に開発された新興住宅地である。毎年夏祭りを実施し、住民の横のつながりが構築されている。2003年から自主防災組織を立ち上げ、重要支援者の名簿作成や、他市町村との災害時相互協力協定の締結等を進めてきたことから、防災意識の高い町として全国に知られている。震災当日も、支援者リストにある約50人全員の安否確認は約1時間で完了した。備蓄食料が底をつく4日目には、2010年に町内会レベルで「災害時相互協力協定」を結んだ山形県尾花沢市・鶴子地区の人たちが、トラックに食料を積んで駆けつけてくれた。こうした町内会の取り組みは、「福住町方式」と呼ばれ、地域の防災モデルとして一躍注目された。</p> <p>（２）東日本大震災時の避難所について</p> <p>ライフラインは止まり、電話・メールなどの通信も途絶えた。災害時に水が出る公園を知っていたので水汲みに行き、炊き出しを行った。最も困ったのはトイレである。小学校のプールに水汲みに行き、トイレを流した。公園に手掘りのトイレも作った。震災の関連死にはトイレに関したものが多し。外のトイレは寒いし、中のトイレは機能していないので我慢して水分を摂らない人がいる。そうすると体調を崩す。トイレ対策は事前に最優先事項として考慮していただきたい。</p> <p>指定避難所の高砂小学校には500名分の準備しかなかったが、そこへ1,500～1,600名が来たため、立ち上げが遅れた。市役所には、帰宅困難者である2,000名以上の避難者が殺到した。避難所に殺到する8割はいわゆる災害弱者と言われる人たちであり、具体的には高齢者や障害のある方、女性、子どもである。女性は子育てをしていて地域の人たちのことをよく把握しているし、コミュニケーション能力が一般的に高いので、女性が男性と一緒にリーダーとなって動いたほうが避難所はうまくいく。</p> <p>また大災害では公助は期待できない。通信手段がストップしているし、道路も寸断されている。その上行政自体もパニックで、立て直すのに時間がかかる。そのため、公助に頼らない、地域での自主防災の対応が重要で、そのためには周到な事前準備が必要なのである。普段から準備や訓練をしていないところは、非常時になってもできない。これが私たちの東日本大震災の教訓である。</p>

(3) まとめ

福住町の防火・防災訓練では、災害時の対応、減災を「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに毎年訓練している。15年前から消防署の指導ではなく、福住町独自の企画と運営で、「全員参加型」を目指す防災訓練である。大きな公園に 20 あまりのブースを設け、さまざまな催しをしている。中には水道、ガスなどライフライン担当者から話を聞くブースもあり、発災からどうやって対処したら良いかを教えてもらう。訓練には中学生にも参加してもらっている。防災教育は子どもの頃からでないとい間に合わないし、中学生たちは東日本大震災の際、実際に貴重な戦力として避難所で活躍してくれた。

震災後、避難所運例マニュアルにも変化し、避難所は体育館から校舎の 2～4 階に避難するようになり、避難所運営委員企画員として女性の参画も進んでいる。また、避難所で使用する簡易トイレは、東日本大震災時の教訓から洋式化を促進してもらい、現在は 7：3 で洋式トイレが増えている。

被害を少なくするのも復興も、主体は自分であることを認識していただきたい。災害が大きければ大きいほど公助は来ない。自分のことは自分でやり、隣近所、町内で助け合うしかない。また、どんなに文明が発達しても私たちは自然災害の前では無力である。東日本大震災では、このことを思い知らされた。災害に対する知識や備えがないと、一方的に災害に負けてしまうのである。日常の取り組みと訓練が、災害時に力を発揮するということを強く認識した。重要支援者の住民の名簿作成を行っていたこと、全員参加型の防災訓練を行っていたこと、それから災害時相互協力協定を結んでいたこと、これらが全て大いに役に立ったことは間違いない。



開催地より

これから当市で取り組んでいかなければならない防災活動について、一つのヒントとしていきたい。今後は、市職員参加の防災訓練等において自助共助の重要性について講話を行うとともに、HP 等で備蓄の呼びかけを行っていきたいと思う。